## 『徒然草』の研究

# —『白氏文集』受容考(二)

#### はじめに

されるのである。

**集』そのものを熟読する過程から生じて来たものであったと推察** 

本論文は「「徒然草」の研究―『白氏文集』受容考― (一)\*1」 「文集」とする)受容の様相を検討してみると、『徒然草』に引用されている白楽天の詩句のほとんどは和歌や物語、或いは 『千般佳句』『和漢朗詠集』に代表される佳句選等の先行する日本の古典文学作品の中にその受容例を見出すことが可能である。 『千般佳句』『和漢朗詠集』に代表される佳句選等の先行する日本の古典文学作品の中にその受容例を見出すことが可能である。 本の古典文学作品の中にその受容例を見出すことが可能である。 本の古典文学作品の中にその受容例を見出すことが可能である。 されるケースも少なくないかに感ぜられる。しかしながら、『文集』 されるケースも少なくないかに感ぜられる。しかしながら、『文集』 されるケースも少なくないかに感じられるように王朝人の文学や 等であり、『枕草子』に典型的に見られるように王朝人の文学や 等であり、『枕草子』に典型的に見られるように王朝人の文学や 等であり、『枕草子』に典型的に見られるように王朝人の文学や 等であり、『枕草子』に典型的に見られるように王朝人の文学や

金文峰

いても白詩の影響を受けたと考えられる若干の章段を取り上げ、例も散見されるのである。本論文においては、主題や椋想面におのを発想の源泉としたり、内容や椋想の面でごく近似している事検討して行くと、単に修辞のレベルに留まらず、詩の主題そのもところが、『徒然草』における『文集』の受容の様相を個別に

兼好の『文集』受容を違った角度から考察してみたいと思う。

『徒然草』 第三八段と『文集』の「勧酒」・「渦底松」・「続き「徒然草」 第八段・第九段と『文集』の「古塚狐」
 『徒然草」 第八段・第九段と『文集』の「不致仕」

### 古詩十首」の第四首

●『徒然草』第四三段と『文集』の「尋春題諸家園林」・「又顧

●『徒然草』第一七四段・第七五段と『文集』の「老来生計』

うに『徒然草』に取り入れているか、さらに具体的に検討してみこれらの事例のそれぞれについて、兼好は白詩の内容をどのよ●『徒然草』第二三五段と『文集』の「凶宅」

第七段と「不致仕」の共通性については、戸谷三都江氏の「『徒」たい。

係について考察してみたいと思う。 詳論されている。この戸谷氏の論文を踏まえて、改めて両者の関禁論されている。この戸谷氏の論文を踏まえて、改めて両者の関然草」の方法-『白氏文集』受容における

職に恋々たる者を諷喩する内容である。両者の対応する箇所に共ている。一方、第七段の典拠とされる『文集』の「不致仕」は宮充実を心がけず、際限なく欲望を肥大させる人間の醜さを批判し無常の肯定と人間の生の長さに触れ、その長い人生における内的無な段は、「世は定めなきこそいみじけれ」を書き出しにして、

を恥づる心もなく、③人に交はらむことを思ひ、④夕の日にこそ、めやすかるべけれ。 そのほど過ぎぬれば、①かたちければ恥多し。②長くとも、 四十に足らぬほどにて死なん住みはてぬ世に①見にくき姿を待ちえて、何かはせむ。命長

通の番号を付して次に掲げる。

栄す者、斯言如シュ不ザルン間。①可シュ怜ム八九十、歯堕ヶ雙七十而ニシテ致仕スルハ、禮法ニ有リ1明文 |。⑤何ッ乃ヶ食ルンゆくなむ、あさましき。 (第七段)かくなむ、あさましき。

子孫を愛して、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、⑤ひ

レ冠ヲ願"「「衆終ヲ」、懸ントシテレ車ヮ惜よ」「朱輪ヮ」。 金章腰「眸昏」。⑤朝露貪゚」「名利ヮ」、④夕陽憂っ」「子孫ヮ」。③掛ントシテ眸舒」を「朝露ぬら」「不が」」聞。 ①可シ」怜よ八九十、歯堕ヲ變

名遂ラ合ペン レ退クレ身ョ。⑥少4時八共二階龍スレドモ、晩歳多誰カ不ザランレ戀ハ1君恩ョ1。②年高クシテ須や、 レ語フレ老マ、

不ず」勝へ、偃俊シテ入ル」君門二。能の不ザランレ愛七」宮貴ョー、

の④「夕陽憂子孫」に拠っているということは『寿命院抄』を第七段の④「夕の日に子孫を愛して」が『文集』巻二「不致仕」

路、無ショハ人ノ継グニ去塵ョー。

^因循ス。賢ナル哉漢ノ二疎、彼独「是レ何人ン。 寂寞タル東門ノ

七段では四十歳を以って「死なんこそ、めやすかるべけれ」としている。としているのに対して、第には通うところが少なくないことが窺われる。「不致仕」が官職には通うところが少なくないことが窺われる。「不致仕」が官職には通うところが少なくないことが窺われる。「不致仕」との間うに、その他の細部の叙述においても第七段と「不致仕」との間うに、その他の細部の叙述においても第七段と「不致仕」との間

ている。一見したところ、七十歳と四十歳とでは全く異なるよう

仕」を始めとする白詩の影響下に成立したと理解することも十分とを詠んだ詩が多く見られるのであって、戸谷氏は、『徒然草』とを詠んだ詩が多く見られるのではないかと推察されている。こ白詩の影響下に得られたものではないかと推察されている。このように「四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」という記述にも白詩の考え方の投影が認められるとするのであるならば、第七段はその主題構想から叙述の細部に至るまで「不致ならば、第七段はその主題構想から叙述の細部に至るまで「不致ならば、第七段はその主題構想から叙述の細部に至るまで「不致ならば、第七段は大きない。」

いと思う。 では第八段、第九段と「古塚狐」との関係について検討してみたでは第八段、第九段と「古塚狐」と「太行路」の二首であるが、ここられている白辞は「古塚狐」と「太行路」の二首であるが、ここられている白辞は「古塚狐」と「太行路」の三徹に関して『徒然草』全年 然草』第八段、第九段は人間の色欲に関して『徒然草』全

に可能である。

○世の人の心まよはすこと、色欲にはしかず。人の心は愚かならづきたらんは、外の色ならねば、さもあらむかし。
 ○大米の仙人の、物洗ふ女の脛の白を見て通さする物なり。
 ○入米の仙人の、物洗ふ女の脛の白を見て通さする物なり。
 ○人米の仙人の、物洗ふ女の脛の白を見て通さする物ならず心ときめ、

⑦女は髪のめでたからむこそ、人の目立つべかめれ、人のほ

(第八段)

| 覆ス||人ノ国ョ| 。君看"為スト害ヲ浅深ノ川。豈ニ将テ||假色ヲ

|同ウセンヤ||真色ニ|。

笛には、秋の鹿かならず寄るとぞ言ひ伝へ侍る。⑨身づかららるれ。(中略)まことに、愛着の道、その根深く、源遠し、六應の楽欲多しといへども、皆厭離しつべし。其中に、②だいかの惑ひの一つやめがたきのみぞ、老たるも若きも、智あるも思かなるも、変る所なしと見ゆる。されば、®女の髪筋をはれる綱には、大象もよく繋がれ、女の履ける足駄にて作るとれる綱には、秋の鹿かならず寄るとぞ言ひ伝へ侍る。⑨身づからど、心ばへなどは、物言ひたるけはひにこそ、物越しにも知ど、心ばへなどは、物言ひたるけはひにこそ、物越しにも知

古塚/狐 ⑨戒ムル||跪色ヲ|也

(第九段)

戒めて、恐るべく、慎むべくは、この惑ひなり。

古塚ノ狐妖ニシテ且ッ老タリ。②化シテ為テ ||婦人二 | 顔色好シ。

第八段の③「しばらく衣装に薫物す」の部分については、諸注一

も描き出す。すなわち嗅覚、視覚、聴覚というさまざまな官能を

については、『寿命院抄』が『文集』巻四「古塚狐」の「假色迷 致して『文集』巻三「太行路」の「為君蘇衣裳」に拠っていると 指摘し、冒頭の①「世の人の心迷はす、色欲にはしかず」の部分 人猶若是。與色迷人応過此」を典拠として指摘するのを筆頭に、『野

これに対して、『徒然草解釈大成』や新日本古典文学大系『方丈生』 『慰草』『文段抄』も「古塚狐」の同一の詩句を引いている。

『徒然草』第八段、第九段と白酢の「古塚狐」との対応する筃

の典拠として「假色迷人猶若是。真色迷人応過此」の詩句を挙げ 記・徒然草』では⑥「外の色ならねば、さもあらむかし」の部分

所を見ると、確かに全体として両者の内容はよく近似しているよ

ことについて言及して「假色迷人猶若是」と述べ、本物の人間の うに思われる。「古塚狐」では、婦人に化けた狐のさまざまな態 女性の媚をなすがごとき振舞いに惑わされることを「真色迷人応 ―「雲繋」「粧」「長紅裳」―を「見」た人々が惑わされるという

様子を述べる一方で、つやつやと脂ののった肌の美しさに代表さ である。これに対して『徒然草』では、最初に「匂ひ」、それか 過此」と評している。つまり視覚を通じて人々は迷ってしまうの れる女性のあらがたがたい本質的な魅力に惑わされてしまう姿を のかりそめのものである衣裳の薫物にも心をときめかせる人々の ら「蒸物」「手足、はだへ」「髪」「物言ひたるけはひ」と、ほん

> 失った伝説を引いている。仮のものである「匂ひ」に心惑わされ、 白楽天は周の幽王が褒姒に、殷の紂王が妲己に惑わされ国を亡ぼ として「髪」を挙げている点である。さらに、その具体例として 目されるのは、兼好も白楽天も同様に女性の魅力を象徴するもの **通じて男性が女性の容色に惑わされるさまを述べるのである。** さらに「外の色なら」ぬ女性の本質的魅力には久米の仙人までも したことを引き、兼好は久米の仙人が女の脛の白さを見て迎力を

想が投影していると考えたい。 若是」と「真色迷人応過此」とを対比して述べる「古塚狐」の構 との関係について検討してみる。 識について語っている。まず、三八段の第一、第二段落と「忇酒 第三八段は、人生における名利はすべて空しいという醒めた認

が眩惑されるとする『徒然草』第八段の叙述には、「假色迷人猶

わ[づ]らはるべき。恐かなる人の目を喜ばしむる楽しみ、ま たあぢきなし。(中略)利に惑ふはすぐれて思かなる人なり。

勧ふ||君二一盃"| 君莫し」辞スハ、勧ふ||君ニ両盃"| 君莫し」疑

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚 ちなり。身の後には金をして北斗を支ふとも、人のためにぞ 財多ければ、身を守るにまどし。害を買ひ、煩ひを招く中だ (第一段落)

かなれ。

つ。鋤、11君・三盃。1君始、ず知ラン、面上今日老ユルリ11作日

ズ」如か11生前一樽/酒1。 白兎赤鳥相越を走れ。身後堆クシテン金ョ拄フルモ」北斗り、不 ゚。。心中酔ヮ時勝ル゚。醒ムル時ニ゚。 天地迢迢トシタタ自タ長久。 (勧酒)

金・北斗、不如生前一樽酒」に拠っていると指摘している。名利 ている。傍線部分の「身の後には、金をして北斗を支ふとも」は、 の目を喜ばしむる楽しみ」を挙げ、これも「あぢきなし」と述べ 三八段において否定されるのは、第一に「財」である。続いて「人 『柱命院抄』以来の多くの注釈書が『文集』「勧酒」の「身後堆

の関係については、「単なる引用程度」とし、考察の対象として というのがその内容である。この第三八段と『文集』との関係に ど金宝を積もうとするが、死んでしまったら何の役にも立たない いない。だが、「身の後には、金をして北斗を支ふとも」の一節 ついては、戸谷三都江氏も詳論されているが、右の「勧酒」詩と

のために世間の人々が営々辛苦して、死後に天上の星を支えるほ

る。白楽天は人間の生は死によって完結するということを十分に て死後に余財を残すことの無意味を説くのが「勧酒」の趣旨であ 応する箇所は見られない。しかしながら、酒を勧めることを通じ 詩の中の他の詩句と、第三八段の第一、第二段落との間に直接対 もちろん「身後堆金拄北斗、不如生前一樽酒」を除く「勧酒」 いのであろうか。

ははたして戸谷氏が説かれているように「単なる引用」でしかな

営々。終日群動つ間。所」務っ雖モレ不ズトレ同ジ。同ジウス」帰り於 卷九、感傷一の「別楊頴士盧克柔殷尭藩」(0433) は「人生苦ァ 生のはかなさを述べ、時に及んで行楽すべきことを説いている。 餘貲 | 。焉'用ヮルヲ | 黄娘ノ下。珠衾玉匣 > | 為サン」と、これも人 四の「迶歌詞」(0357) は、「生前不メンバ」歓楽ゼ「。死後有ターズ「「 する内容の詩は、『文集』中に少なくない。例えば、巻八・閑適 認識した上で、この世の空しさをかみしめていた。「勧酒」に類

不関い」。」と、世の人が皆物欲に駆られて終日あくせくとして安

んずるところなく閑暇のない生き方をしているのが、憐れに見え

の趣旨においてやはり共通するところがあるように思われる。 ると詠んでいる。 余財を残すことの無意味を説く『文集』の「勧酒」との間にはそ 第三八段の第三段落を戸谷氏は『文集』の「澗底松」との近似 名利を無用のものとする第三八段の第一、第二段落と、死後に

文を掲げる。 第三八段の第三段落、「澗底松」及び「続古詩十首」 第四首の本 「統古詩十首」の第四首をも合わせて考えてみたいと思う。まず、 性から論じられている。首肯されるべき見解であるが、ここでは

埋もれぬ名を永き世に残さんこそあらまほしかるべきに、 り、奢りを極むるもあり。②いみじかりし賢人、聖人も、み ①思かにつたなき人も、家に生れ、時に週へば、高き位に至 位も高く、やむごとなきをしもすぐれたる人とやいふべき。

ひとへに高き官位を望むも、次に愚かなり。づから賤しき位にをり、時に遇はずしてやみぬる、又多し。

(第三八段第三段落)

①金張ハ世禄セランテ②源感ハ貧ナリ。牛衣ハ寒賤ニシテ貂蝉ハ貴シ。諭ラン蒼蒼々ル造物ノ意。但ダ與ヘテニ之に材ヲニ不ズレ與ヘレ地ヲ。子ノ明堂欠クニ梁木ヲ」。此ニポメ彼ニ有リ両ツ不ズレ知ラ。誰カク山険ニシテ人略絶ェ。老死スル不ズ」逢ハニエノ度ルニ」レ之ヲ。天②有リレ松百尺大十囲。生ジテ在リニ洞底ニ:寒ク且ッ卑シ。凋深

勁木ヲ」、澗松キ推レテ為ハレ薪ト。風ニ推ハト此レ何ノ意ヅ、雨ニ①雨露ハ長メ゙「繊草ヲ」、山苗キ高ク入ハレ窯ニ。②風雪ハ折ハ」歴歴天上ニ種エタルワ」日楡ヲ」。 (澗底松念「寒傷」也)

未ス「|必メシモ愚ナサ「。君不メキ」見沈沈海底ニ生シ「珊瑚サ「。牛衣高下雖サ」有リト」殊ナル。高者未タ「必メシサ賢ナウ」。下者

春ナリ。可ベシン憐み苦節ノ士、感ジテレ此ニ涕盈ッレ巾ニ。

(統古詩十首の第四首)

長メルハ彼レ何ノ因ン。②百丈ナルモ澗底に死し、①寸茎を山上に

「澗底松」でいう「金張」は、ともにその子孫代々皆大官となっ

を人間社会に喩えて、社会の不合理を悲しむ詩人の心境を詠んでている「勁木」「澗松」と山上に時を得ている「繊草」「山苗」とた魯の原憲のことを指す。「続古詩十首」第四首は、澗底に倒れた漢の金日磾と張安世を指しており、「原憲」は、清貧に甘んじ

いる。

対して「澗底松」では「金張」の名を挙げ、「統古詩十首」第四応する箇所を見ると、『徒然草』で言う「愚かにつたなき人」にている。第三段落と「澗底松」及び「続古詩十首」第四首との対望む」ことであり、また、名声を求めて腐心することも否定され

三八段の第三段落で兼好が斥けたのは、「ひとへに高き官位を

聖人」に相当するものとして「澗底松」では谷底に生い育った「松」できたのである。一方、『徒然草』に言う「いみじかりし賢人、いが、よい環境に恵まれ、時運に遇ったがために出世することが首では「繊草」と「山苗」を挙げている。いずれも素質才能はな

えているのである。 が、「將」は俊に同じで、俊才が貧贱に沈淪してしまうことを喩が、「將」は俊に同じで、俊才が貧贱に沈淪してしまうことを喩を挙げている。「澗底松」は白楽天自注に「念;|寒雋; 也', 『祀仏」

「澗底松」・「続古詩十首」第四首のごとき趣旨の詩は『文集』

められるのであって、立派で才能がある人であっても、環境に恵(0104)、「潯陽三題并序」(0061) などがその例である。世に(0104)、「潯陽三題并序」(0061) などがその例である。世に容れられぬ俊才の悲劇は白詩の大きなテーマであるが、兼好はそのことを当然承知しており、共感を抱いたであろうと推測される。このように見てくると、「澗底松」及び「続古詩十首」第四首と、このように見てくると、「澗底松」及び「統古詩十首」第四首と、このように見ている。「羸敗」(0016)、「和大觜鳥」に散見する。「羸敗」(0008)、「契劉敦質」(0016)、「和大觜鳥」に散見する。「羸敗」(0008)、「契劉敦質」(0016)、「和大觜鳥」

まれなければ自分の才を十分に生かせないまま沈淪してしまい、

逆に、たとえ愚かな人であっても豪華な家に生れ運がよければ高 識という点で右の三者は共通している。世俗の名利を否定する人 い官位に至ることができるという人間社会の現実に対する苦い認

生観は、何も白詩に限って見られるものではなく、例えば、日本 白詩受容の実例を鑑みると、兼好の名利観に白詩の人生観からの の仏教説話などにもしばしば示される考え方であるが、これらの

少なからぬ影響があるのは否定しきれないであろう。

た話を記している。「庭に散しほれたる花、見過ぐしがたきを、 第四三段は、春の暮、風雅な家で一人読むする若い男を垣間見

入て見れば」の部分の典拠として、『文集』巻六六の「尋春題諸

指摘を踏襲するが、現代の注釈書では新日本古典文学大系本が脚 であり、『野槌』『慰草』『文段抄』などの近世の諸注釈聾もこの 家園林」の「遥見人家花便入」を最初に指摘したのは『寿命院抄』

注に挙げるぐらいであまり受け継がれていない。 ①春の暮つかた、②のどかに艶なる空に、③いやしからぬ家

問ノ到ルレルは。平生身得レドモレ所マ、未ダレ省セ似タルラ;而 ③人ヶ借る二好園林り一。漸少以ッテレ狂の為シレ態で、都で無シー 聞健朝朝出ず、①乗ッテ」春二處處二尋s。②天八供シ11関日月り1、 がたきを、入て見れば(後略) の、奥深く、木立古りて、①庭に散しほれたる花、見過ぐし (第四三段)

> リレ餘リ。④遥二見テ一人家ヨー花アレバ便チ入り、不ズレ論ゼ三段 戝〜與二親疎〜ラー。 貌、随ラン年二老は欲スル1何如セント1、興八四ラン春に幸し尚水有 (尋春題諸家園林又題一絶)

叙述を対照してみると、両者はその構想面において相通じるとこ 右に掲げた『徒然草』第四三段と『文集』「尋春題諸家園林」の

語り手の眼前に展開する情景を描く。一方、「尋春題諸家園林」 からぬ家の、奥深く、木立古りて」と風雅な邸宅の佇まいを描き 「庭に散しほれたる花、見過ぐしがたきを、入て見れば」以下、

節を示し、「のどかに艶なる空」の笑しさを背景として、「いやし

ろがあると思われる。第四三段では、まず「春の暮つかた」と季

では、まず「春」という季節の枠組みを提示し、「天供閑日月」 間を定めて詩人の思いと行動を以下に述べる。 と天候の様子を示す。さらに詩の舞台となる「好園林」という空 さきにも述べたが、第四三段の「庭に散しほれたる花、見過ぐ

とする近世の注釈瞽でなされたもので、現代の注釈瞽はほとんど 言及していない。しかし、右に述べたごとく、『徒然草』 第四三 しがたきを、入て見れば」の部分の出典を「尋春題諸家園林」の 「遥見人家花便入」に求めるという指摘は、『寿命院抄』を始め

であって、本段における『文集』の受容についても積極的に認め

を定めていく叙述の運び方に非常に近似したものが認められるの 段と「尋春題諸家園林」は、その舞台となる時間、空間の枠組み

るべきではないかと思われるのである。

志すことを勧める段である。この段と『文集』とのかかわりを検 第一七四段は、鷹狩に用いる犬の話から所縁を放下して仏道に

うに思われる。 (前略) ①人事多かる中に、道を楽しむより気味深きはなし。

活を送ることを主張する第七五段をも併せて考える必要があるよ 討するには、諸縁を放下し、世俗との交わりを避けて、閑かな生

づれのわざか廃れざらむ、何事をか営まん。思かなる人とい 是、まことの大事なり。一度道を聞きて是に心ざ、む人、い

を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく ふとも、賢き犬の心に劣らむや。 (前略) いまだまことの道を知らずとも、②縁を離れて、身

(第一七四段)

地であるだろうか。

老来ノ生計君看取せる、白日遊行シャ夜醉吟ス。陶令有リテレ田 縁をやめよ」とこそ、摩訶止観にも侍めれ。 楽しむとも言ひつべけれ。「生活、人事、伎能、学問等の諸 (第七五段)

唯種で」秫、鄧家無クシテン子不ざ」留さし金。 ①+②人間/栄 耀ハ因縁浅々、林下ノ幽閑ヶ氣味深シ。 煩慮漸ヶ銷シテ虚白長シ、 一年ノ心ハ勝ンリー年ノ心ョリモー。 (老来生計)

日本古典文学大系本などでなされたものの、近世の注釈書ではほ 来生計」の「人間栄耀因縁浅、林下幽閑氣味深」に拠っていると いう指摘は、『解釈大成』『全注釈』及び戸谷三都江氏の論文や新 第一七四段の「道を楽しむより気味深きはなし」が、『文集』「老

> ことを専ら勧めているが、ここで言う「道」は仏道修行を指すと 来生計」の詩において白楽天が願う「林下幽閑」はどのような境 うのがこの二段に見られる並好の主張である。これに対して「老 的に願い求めるべきは仏道に帰依して真の悟りに至ることだとい いる。諸縁を離脱した閑雅な生活を勧めながらも、人として最終 活、人事、伎能、学問」にわたって諸縁を放棄する心得を述べて 考えられよう。第七五段の「まことの道」も同様の意であり、「生

とんど言及されていない。「人事」の中でも特に「道を楽しむ」

れるように、公務と言っても、官寺に参詣したり上奏文を草する れていた。太子少傳分司は「分司」(2382)という詩からも窺わ この詩を詠じた時、白楽天は太子少傳分司という官職に任ぜら

くらいの勤めしかない。その余暇は「澆テレ畦ニ引キ||泉脉ゥ|、

琴龍ヶ帆ヶ挙ゲレ酒ヲ、酒龍ヶ輒チ吟ズレ詩ヲ」(「北窓三友」 2985) ラ問っ何ノ所ソ」為ス。欣然トシテ得タリリ三友リ、三友、者為スレ誰トカ。 掃テム径ッ避ク||闌芽ッ|」(「営閑事」 3116)、「今日北窓)下、自

とき境地であったと考えられる。「人事多かる中に、道を楽しむ な生活を指すのであって、白楽天が常に敬慕していた陶淵明のご ある。「林下幽閑」は、世間の煩わしい因縁とはかけ離れた長閑 というように、老後の生活を楽しむことに専ら宛てていたようで より気味深きはなし」と「林下幽閑氣味深」との言い回しの類似

から考えて、第一七四段を構想する兼好の念頭に『文集』の「老

する。兼好にも陶淵明的な隠逸嗜好があったことは確かであり、詩に見られる白楽天の心境との間には、少なからぬ隔たりが存在兼好の考え方と、陶淵明的な脱俗安逸の境地を希う「老来生計」があった蓋然性は高い。しかしながら、ひたすら仏道修来生計」があった蓋然性は高い。しかしながら、ひたすら仏道修

自計と異なって『徒然草』が仏道への志を強調することは十分に白詩と異なって『徒然草』が仏道への志を強調することは十分に

それが「老来生計」詩の受容を促したと解してよいのであろうが、

物も、②人気に塞かれねば、③所得がほに入り住み、①木霊主ある家には、道行き人みだりに立ち入り、①狐、鬼やうの主なき所には、道行き人みだりに立ち入り、①狐、鬼やうのの段の典拠とされているのは、『文集』の「凶宅」詩である。第二三五段は、心の実体や本質について語っている段である。

(第二三五段)などいふけしからぬ⑤形も顕る、物也。(後略)

ものである。

した諷喩詩である。
した諷喩詩である。
と、家自体が不吉なのではないと説き、さらに家も国もその凶因で、家自体が不吉なのではないと説き、さらに家も国もその凶因はつまるところ人凶であると述べ、人々の迷愚を悟らしめようとした諷喩詩である。

蓬生巻の末摘花の屋敷の描写との類似が指摘されている。語」との関係から論じられている。「寿命院抄」以来「源氏物語」この段の「白氏文集」受容について、戸谷三都江氏は「源氏物」

ものわびしきことのみ数知らぬに(後略) と、けしからぬ物ども③所を得てやうやう⑤形をあらはし、 ど、けしからぬ物ども③所を得てやうやう⑤形をあらはし、 と、けしからぬ物ども③所を得てやうやう⑥形をあらはし、 と、けしからぬ物ども③所を得てやうやう⑥形をあらはし、 と、けしからぬ物ども③所を得てやうやう⑥形をあらはし、

東の住処とされるという記事は『源氏物語』夕顔巻にも見られる 関に強い親近感があることも否定できない。荒廃した場所が狐、 「漁月抄」等の注釈書がその説を受け継いでいる。『源氏 江入楚』「湖月抄』等の注釈書がその説を受け継いでいる。『源氏 江入楚』「湖月抄』等の注釈書がその説を受け継いでいる。『源氏 計の「泉鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を指摘して以来、『細流抄』『岷 詩の「泉鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を指摘して以来、『細流抄』『岷 詩の「泉鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を指摘して以来、『細流抄』『岷 詩の「泉鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を指摘して以来、『細流抄』『岷 詩の「泉鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を指摘して以来、『細流抄』『岷

「こはなぞ、あなもの狂ほしのもの怖ぢや。①荒れたる所は、「こはなぞ、あなもの狂ほしのもの怖ぢや。①荒れたる所は、「こはなぞ、あなもの狂ほしのもの怖ぢや。①荒れたる所は、「こはなぞ、あなもの狂ほしのもの怖ぢや。①荒れたる所は、

関係から見ると、夕顔巻の記述の方がより近いのではないかと述るべきであるが、二三五段の主題となっている「家」と「心」のしてはその表現の近似の度合から言えばまず逢生巻の記事を挙げしてはその表現の近似の度合から言えばまず逢生巻の記事を挙げれる。戸谷氏は、『徒然草』第二三五段の典拠と構叢」を挙げている。戸谷氏は、『液然草』第二三五段の典拠として、『河海抄』『岷江入巷』『湖右の傍線を付した部分の典拠として、『河海抄』『岷江入巷』『湖右の傍線を付した部分の典拠として、『河海抄』『岷江入巷』『湖右の傍線を付した部分の典拠として、『河海抄』『東京社会の表記を記述の方がより近いのではないかと述

だらら。まじます。 ぶょちぎょうとり 引までいる。 というで、「凶宅」 きの関係について論じている。このような発から「家」と「主」との関係について論じている。このような発ところで、「凶宅」 詩は「家」の問題を主題にしており、そこ

いうことは否定できない」と説かれている。

と夕顔と蓬生の三者が、三様の角度から兼好に影響を及ぼしたとべられ、さらに『兼好の心にまず『凶宅』があったにせよ、「凶宅」

りたる月の色も、ひときはしみぐと見ゆるぞかし。今めかし、寒居のつきぐ〜しくあらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、家居のつきぐ〜しくあらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、地は、住居について強い関心を持っていた兼好にも見られるもの

の如何によって雰囲気も変ってくるというのが兼好の住居観であいい家にはいい人が住み、悪い家には悪い人が住む。家は住む人昔覚えて安らかなるこそ、心にくしと見ゆれ。 ちあるさまに、簀子、透垣たよりおかしく、うちある調度も、くきららかならねど、木立物古りて、わざとならぬ庭の草も

凶非宅凶」とあるように、家は住む人の良し悪しに拠るのだとい丈記』にも見られる。他方、『文集』の「凶宅」詩においても、「人る。家とそこに住む人とのかかわりを重視する同様の考え方は『方

う考え方が示されている。第二三五段と「凶宅」詩は、この点に

おいても類似しているのである。つまり、叙述の細部のみならず、

受けていると考えられるのである。

#### おわりに

よりその直接の出典を『文集』そのものに求めるか否かというのというのでになって、ここから兼好の『文集』についての教養のあり方を十分類うことができる。
「徒然草」に引用されている『文集』の詩句については、従来親うことができる。

が讒論になっている。また、近世の注釈書では白詩受容の指摘が

見られるものの、現代の注釈むではほとんど言及されていない事

もしくは相違点を探ってみる作業を試みた。既述のごとく、第八 元に限らず、その主題・構想等様々な角度から洗い直し、共通点 然草』の章段とその典拠になっている白詩との関係を、修辞の次 いては戸谷三都江氏の論に倣って、白詩の詩句を引用している『徒 例も少なからず存在する。このような事情を踏まえ、本論文にお

段、第四三段については、近世の注釈뿁の多くは、白詩の受容を

いない。逆に、第一七四段については、近世の注釈書では言及さ 指摘するものの、現代の注釈甞ではその指摘はあまり継承されて

ある。しかしながら、後者の事例の中にも章段全体の主題や構想 白詩受容をあまり積極的には承認しない場合が少なくないようで として諸注釈眥に広く認められる事例が多いが、後者については け込ませているような場合とがある。前者については白詩の受容 に採り入れている場合と、詩句を和文化して文章の中に自然に溶 のまま読み下してそれと分かるような形で『徒然草』の文章の中 いる。『徒然草』における白詩の受容の実状を見ると、白詩をそ れることがなかったが、現代の注釈書では白詩との関係を認めて

注

した。 訓点については、佐久節『白楽天全詩集』全四巻(一九二八年八月~ 今井濱編『白氏文集歌詩索引』(同朋舎、一九八九年十月)に拠り、 一九八八年七月・一九九〇年十一月・一九九三年三月)を参照して付 一九三〇年八月)と新釈漢文大系『白氏文集』三、四、六(明治書院、 一方、『白氏文集』の本文・詩番号は那波本を底本とする平岡武夫・ 徒然草』(新日本古典文学大系、岩波街店、一九八九年一月)に拠った。 『徒然草』の本文は、正徹本を底本とする久保田淳校注の『方丈記・

(1) 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第十二号 年十一月)。 1001

- (2) 「徒然草蹡座」 第四卷 (有精堂、一九七四年十月)。
- (3)『学苑』一九七四年一月号。
- (4) 築宗巴『つれく草寿命院抄』、林道春『野槌』、松永貞徳『慰草』 は、初刻本を底本とする吉沢貞人『徒然草古注釈集成』(勉誠社、 一九九六年二月)に拠った。
- (6) 北村季吟『徒然草文段抄』。本論文は寛文七年の板本を利用した。 (5)拙稿「兼好と白楽天の病気観・健康観について」(『岡大国文論 稿』第六号、二〇〇〇年三月号)参照。

(?) 三谷栄一·峯村文人編『徒然草解釈大成』(岩崎眥店、一九六

六年六月)。

(8)「埋もれぬ名を長き世に残す」の部分については、諸注一致し る第三八段と、文名の不滅を説く「囮故元少尹集後二首」詩の趣 て「題故元少尹集後二首」の「埋骨不埋名」に拠っていると指摘 している。しかし、「身の後の名、残りてさらに益なし」と述べ

窥われるのである。

あって、兼好の白詩に対する理解がその内容面にまで及ぶことが において、白詩との近似を指摘し得るケースが散見されるので

骨不埋名」の関係については、戸谷氏が説かれるように「単なる 旨とは必ずしも一致せず、「埋もれぬ名を長き世に残す」と「埋

(9) 『源氏物語』 の本文の引用は、新編日本古典文学全集本 (小学館) 引用」の次元に止まると理解してよいであろう。

に拠った。源氏物語の古注釈書は、『紫明抄』『河海抄』『花鳥余僧』 『細流抄』『岷江入楚』『湖月抄』等を参照した。 (きん ぶんぽう 岡山大学大学院文化科学研究科)

研究室受贈図書雑誌目録以

文研論集(専修大学大学院)

三七、三八

別府大学国語国文学(別府大学国語国文学会) 文莫(鈴木朖学会) 二四 四二

方位(熊本近代文学研究会) 1111

三田國文 (三田國文の会) 三三、三四

無差(京都外国語大学日本語学科) 八 武庫川国文(武庫川女子大学国文学会) 五六、 五七

百舌鳥国文(大阪女子大学大学院国語学国文学専攻 明治大学日本文学(明治大学日本文学研究会) 在院生の

山形女子短期大学紀要(山形女子短期大学)

山口国文(山口大学人文学部国語国文学会)

二四

山邊道(天理大學國語國文學會) 四五

立教大学大学院 日本文学論叢(立教大学大学院文学研究科日本 文学専攻) 創刊号

**論究日本文學(立命館大学日本文学会)** 立教大学日本文学 (立教大学日本文学会) 七四、七五 八五、八六

論樹 (論樹の会) 十五

論集 **論輯(駒沢大学大学院国文学会)** (南山大学日本文化学科) 創刊号 二九

和洋國文研究(和洋女子大学国文学会) 三六